

# アーレントにたいする或る哲学的アプローチ —ブラウン『アーレントの超越論的活動力概念』を読む—

橋爪 大輝

## 目次

はじめに

1. 本書の全体像

2. 本書の内容

2.1. 超越論的活動力概念

2.2. 労働

2.3. 制作

2.4. 活動

3. 本書の評価

3.1. 目次構成にかんする問題点

3.2. 思想史的な理解の問題点

3.3. 超越論的な読解の問題点

おわりに

## はじめに

映画『ハンナ・アーレント』の公開を機縁に、現在邦語のアーレント研究がふたたび活気づいている<sup>1</sup>。『イエルサレムのアイヒマン』公刊をめぐる論争をドラマチックに描いたこの映画のなかでも見られるように、つねに同時代の状況に気を配る姿勢は彼女の思考を特徴づけるもののひとつである。けれどもその姿勢が彼女の思想の体系化を妨げたきらいもある。浩瀚な著作でさえ体系性はとぼしい。こうした体系性の欠如が災いして、彼女が哲学者であると認めないむきも多い。それは、真摯に遂行される哲学ほど、あらゆる予断や前提を排そうとつとめ、いきおい基礎づけからはじまる独自の体系として構想される傾向があるからだ

ろう<sup>2</sup>。彼女は「哲学を深く理解した政治理論家」ではあるが、哲学者ではないのではないか。あるいはアバンスールが主張するように、彼女にとって哲学と政治の緊張関係こそ重要であり、むしろ政治哲学に対抗して彼女はじぶんの理論を形成したのではなかったのか<sup>3</sup>。はたして彼女自身、じぶんは哲学者でないと述べているではないか<sup>4</sup>。こうした予断のもとで、アーレントの思考の哲学性は見逃されつづけてきたと言える。

哲学でなければ、彼女の思考の価値が減ずるわけではない。とはいえ、これだけで彼女が哲学者でないとするのも、いくぶん即断のきらいがある。体系性についていえば、時局的な文章を読んでも、書かれていることを裏うちしているのはじじつ或る種の書かれざる体系であったと見えるし、他方たしかに彼女は哲学とはべつの領域として政治を構想したが、政治が見出されるのは哲学の限界においてであり、彼女の政治理論はいわば反転した哲学という性格をもつはずなのだ<sup>5</sup>。そうであれ

<sup>1</sup> 2013 年にはアーレント関連著作がつぎつぎ上梓された。『理想』のアーレント特集（『理想』第 690 号「特集・アーレントと現代世界の危機」理想社）をはじめ、森一郎『死を超えるもの—3.11 以後の哲学の可能性』（東京大学出版会）、今出敏彦『ハンナ・アーレントの『人間の条件』再考—世界への愛』（近代文藝社）、小玉重夫『難民と市民の間—ハンナ・アーレント『人間の条件』を読み直す』（現代書館）、中山元『ハンナ・アーレント〈世界への愛〉—その思想と生涯』（新曜社）が出版されている。さらに、アーレントの『ユダヤ論集（Jewish Writings）』（山田正行ほか訳、みすず書房）が 2 巻本として翻訳された。

<sup>2</sup> 無前提な立場が要請されるというのは、けっして恣意的なことではない。というのも、仮に思考がある前提に依って開始されるとしても、哲学はその前提をも問ひ直さずにいないからである。他方で、そうした展開は、概念に内在的する論理にしたがって行なわれる。つまり哲学の論理の展開は、連想や類比に依拠したりはしないし、現実の歴史的事件によって説明されるべきでもない。

<sup>3</sup> Miguel Abensour, «Hannah Arendt contre la philosophie politique?», dans: *Hannah Arendt: L'humaine condition politique*, sous la direction de E. Tassin (Paris: L'Harmattan, 2001), 14. かれは、政治哲学をプラトンのころみに結びつける。つまり哲学者の王がほかの人間を支配することで、哲学者の危険を除去しようということみにほかならない。たしかにこれはアーレントの政治理論の主旨とは、おおきく隔たっている。

<sup>4</sup> Hannah Arendt, *The Life of the Mind*, Vol. 1: Thinking (San Diego et al.: Harcourt, 1977), 3.

<sup>5</sup> Hannah Arendt, *Vita activa: oder Vom tätigen Leben, ungekürzte Taschenbuchausgabe* (München/Zürich: Piper, 2010), 18 では、つぎのように言われていた。「そしてさらに、活動はすぐれて政治的な活動力なのだから、政治的な思考にとっては出生が、決定的で、カテゴリーをかたちづくるような事実であるということは、じゅうぶん

ば、彼女の思考の哲学的な部分を十全に理解しなければ、アーレント思想の全体を理解したことはならないはずである。以上の理由から、評者は第一にアーレント研究という範囲内で、彼女を哲学的に理解することが必然的に要請されるし、第二に、哲学史の全体にアーレントを位置づけるといふ、より一般的で大きな課題のためにも、この哲学的解釈は不可欠なはずである、と考える。そうであれば、そしてウルズラ・ルッツが言うようにアーレントは「理解したいと思うことがらを、つねに哲学的な概念、ならびに／あるいは哲学的な問題だてのうちで把握していた」<sup>6</sup>とすれば、重要なのはおそらく、アバンスールがしたように彼女が哲学をどう評価していたかを分析することではなく、彼女の理論、意図や方法それじたいが有する哲学性（彼女の哲学の実践）を適切に見いだすことだろう。しかしそういった研究はほとんど行なわれてこなかったというのが、現状なのだ。

本稿が取りあげるマーティン・ブラウン『アーレントの超越論的活動力概念—アーレント政治哲学の体系的再構築、ヤスパースとハイデガーを参照しつつ』（Martin Braun, *Hannah Arendts transzendentaler Tätigkeitsbegriff: Systematische Rekonstruktion ihrer politischen Philosophie im Blick auf Jaspers und Heidegger* (Frankfurt a. M. et al.: Peter Lang, 1994)）は、その点にアプローチする方法論的視角を呈示する、数少ない研究のひとつである（本書の引用にかぎり、括弧内に頁数のみで示す）。その鍵語が「超越論的活動力概念」ということになる。もはや少し古い研究にぞくするが、とはいえ邦語のアーレント研究ではほとんど引用されていない本研究に、例外的に言及している小野紀明が述べているように、ブラウンは「アーレントの政治概念を明確に超越論的に理解された概

念として考察している」<sup>7</sup>からだ。小野は、ブラウンもそのなかに在るところの政治学の現代的動向を、つぎのように特徴づけていた。

現象学以降の政治学は、その都度新たな「地平」を開くことに、また既存の「地平」を維持すること、そして逆に既存の「地平」を脱構築することそのものに「政治的なもの」を認めるようになっていく。[...] 政治概念そのものが存在物的な次元から存在論的な次元へと移行したのであり、この観点に立てば、伝統的な政治学は開かれた「地平」の内部において「同一性」を付与された存在物相互の関係性のみに目を凝らすことから一歩も脱却していないことになる。<sup>8</sup>

同一性を有する存在「物」の性質をうんぬんする物象化された見かたに代わって、そうした存在物の存在／非存在そのものの可能性に問いを及ぼすようになった政治学の上記の動向によって、存在物よりも根源的な地平の開閉に問いは移行したと、小野は述べる。そしてブラウンによれば、地平の開閉は人間の活動力（行為）によって行なわれるのである。存在者（物）や主体、世界よりも根源的な活動力という概念から、アーレントの体系を再構築しようというところみが呈示される。つまりブラウンは、アーレントのうちに革命や公共性、法といった、政治学的な諸問題をではなく、存在者や行為、出来事といった哲学的諸問題を見出すのだ。本稿はこのようなブラウンのアプローチを検討することをつうじて、アーレントの思想を哲学として読むことのひとつの可能性と、その隘路とを見とおそうと企図するものである。

なお著者ブラウンは1960年生まれ、ヨハネス・グーテンベルク大学マインツで物理学と哲学を専攻し、教職の国家試験を受けたのち、1993年、も

ありうる。はるかむかしから、西洋ではすくなくともプラトン以来、死すべき定めが形而上学的・哲学的思考を焚きつけた事情であったのとおなじくらい決定的に、である」。他方、彼女は複数性も、通常の哲学では題材になりえないと捉えていた。たとえば *ibid.* §1 や、Hannah Arendt, *Was ist Politik?: Fragmente aus dem Nachlaß*, Neuausgabe, hrsg. v. U. Lutz (München/Zürich: Piper, 2005), Fragment 1 など参照。

<sup>6</sup> Ursula Ludz, "Hannah Arendts Pläne für eine »Einführung in die Politik«, in: Arendt, *Was ist Politik*, 151.

<sup>7</sup> 小野紀明「ハイデガーとアーレント—『人間の条件』第24、25節の読解」実存思想協会編『実存と政治 実存思想論集XXI』（理想社、2006年）22頁、注2。

<sup>8</sup> 小野紀明「ハイデガーの終末論的政治概念」『ハイデガー・フォーラム』第2号（ハイデガー・フォーラム、2008年）115頁。小野はあわせてエルンスト・フォルラートの名前を挙げている。

うひとつの副専攻として政治学の博士号を取得する。その博士論文が本書である。その後成人教育や脚本家の仕事をするところがあるが、現在の消息は不詳である。

## 1. 本書の全体像

本書は『活動的生 (Vita activa oder Vom tätigen Leben)』(英語版『人間の条件 (The Human Condition)』)<sup>9</sup>を中心に、アーレントの思想全体を扱っている。そこで『活動的生』の基本的論点を確認しておこう。彼女は労働・制作(仕事)・活動という三種類の活動力(Tätigkeit, activity)を分析する。労働は生命という条件のもと行なわれ、生命が消費する必要物を生産する。制作<sup>10</sup>は世界性という条件をもち、持続性をそなえた物を生産し、そうすることで世界を建設する。活動は上のふたつと異なり、人間と人間が直接かかわる活動力で、人間の唯一性がそこで明らかになる。

こうした問題設定を念頭におきつつ、目次を見ておきたい。また、以下省略記号で章節を指示する<sup>11</sup>ので、そのつど参照されたい。

### 序言

#### はじめに

#### A. 活動力概念

##### I. 活動的生と観想的生

##### II. アーレントのハイデガーにたいする関係

##### —超越論的活動力概念

##### III. 基本的条件と基本的活動力を統一するも no

##### —生起

#### IV. アーレントのヤスパーズにたいする関係

##### —諸活動力の内的なつながり

#### V. ヤスパーズ、ハイデガー、アーレントの接点

#### VI. 生起の諸様式内部の分節

#### B. 労働—一生の生起

##### I. 生命、自然

##### II. 労働する動物

##### III. 労働

##### IV. 労働の生産物—消費財

##### V. 社会的動物

#### C. 労働と制作

##### I. ハイデガーとマルクスにたいする関係

##### II. 論争状況

#### D. 制作—世界性の生起

##### I. 世界性

##### II. 工作するひと

##### III. 制作

##### IV. 使用対象物と芸術作品

##### V. 交換市場から世界へ

#### E. 制作と活動

#### F. 活動—複数性の生起

##### I. 複数性

##### II. 政治的人間

##### III. 活動

##### IV. (諸) 歴史

##### V. 国家の諸形態

#### G. 活動と思考

#### 補遺 活動力論の発生のほうへ

#### あとがき

<sup>9</sup> 同書の少しややこしい成立過程について触れておこう。アーレントは1958年、米国で『人間の条件 (The Human Condition)』を出版している。その2年後に、みづからドイツ語に訳し、さらには若干の記述や註を拡充して『活動的生 (Vita activa oder Vom tätigen Leben)』として上梓している。現在は『人間の条件』しか訳されていないが(志水速雄訳、ちくま学芸文庫)、哲学的概念の継承関係なども見えやすいドイツ語版『活動的生』を、実質上の『人間の条件』第二版と見なし、重視する向きも増えつつある。

<sup>10</sup> 『人間の条件』では、仕事(work)と呼ばれている。本稿では、著者が依拠しているドイツ語版にしたがい、制作Herstellenの呼称を採用する(英語版ではfabricationがそれにあたり、workとほぼ同じ外延をもつ)。

<sup>11</sup> 本書のアウトラインは、「大文字アルファベット—ローマ数字—アラビア数字」というレベルになっている。以下では、たとえばFのI「複数性」を示すばあい、「F-I」と表記する。

本書の中核をなすのは労働(B.)、制作(D.)、活動(F.)の活動力を分析する各章である。が、そもそも活動力とはなにか。A. は総序として、この問題を扱っている。活動力とはなんであるのかは、アーレントによって明確には定義されておらず、じつは問われるべきことであるからである。だからまずは、次章の冒頭で、活動力の概念がブラウンなりに解釈されるのを見ることになる。

博士論文として堅実な研究でもある本書は、全体としてアーレント思想の要約的な記述も多く含む。そうした部分もむろん有益ではあるが、タイトルのとおりアーレントを「超越論的」に理解す

るというのが本書の特徴であり、本稿ではその精髓である「超越論的」解釈を紹介することに紙幅の多くを割く。また、活動の分析が本書の大部分を占めるが、ここでも私たちは著者独自の、活動の「言語哲学」的理解を紹介することに重きをおく。このことで要約としてはやや公平さを欠くことになるが、本質的部分が際だつはずだ。

## 2. 本書の内容

### 2.1. 超越論的活動力概念

著者によれば「アーレントの思考にかんする理解は、ヤスパースとハイデガーの哲学に取りくむことによって深められる」(6)。言語哲学と政治理論、言語と政治のかけ橋というその独自の意義にもかかわらず、「アーレントの思考は仕上げがなされてないこと (mangelnder Ausarbeitung) でいつも、くりかえし苦しめられている」(10)。そこで、あくまで「彼女の著作のオリジナルさや、作品内部の首尾一貫性を可視化する」(10) ために両者を参照するのだ。

そのようにして、活動力概念を超越論的概念として再考しなくてはならない (A.)。なぜならアーレントは、活動力を「*ポテンツイアン*」や「*ポテンツイアン*的な出来事」として経験的に記述しているわけではないからである。つまり彼女の活動力概念は活動力の「可能性の条件」にかかわり、実証科学を基礎づけるものなのだという (A.-II.)。

カントが超越論的と呼ぶのは、「諸対象ではなく、諸対象一般について私たちがもつアプリアリな概念にかかわるような、あらゆる認識」<sup>12</sup>である。しかし著者はこの部分をつぎのように解する。「あれやこれやの対象についてのあらゆる認識のまえに、対象一般がなんであるかのアプリアリな認識が存在している。存在者が、あれやこれやの対象として出会われうるために、アプリアリな認識において対象が対象として可能になっていなくてはならない」(17)。ハイデガーがカントを解釈して

言うように、それは「存在者の存在体制の認識」(18) である。存在者にたいするあらゆる振るまいには存在理解が存していなくてはならない。

労働・制作・活動として区別された、存在者にたいする振るまいをアーレントは分析したが、この分析はこうした振るまいのうちに存する存在者の存在理解をあわせて説明するかぎりでは、いまや超越論的な分析であると示される。[...] 区別された諸活動力のうちには理解が存し、理解がそのつどの地平を開示し、この地平は私たちが存在者に会わせる。そうして私たちはじぶんの活動力のなかで、はじめてその存在者にふさわしい交渉を見出し、そのなかでそのつどの存在理解を見出す。(19)

活動力にはそれじたい存在理解がそなわっており、この理解がそもそも対象の認識を可能にするというわけである。たとえばペンは、じつはそれだけでは存在していない。ペンは、文字が書かれる紙や紙が置かれる机を指示している。この連関を把握する私たちの理解にたいし、この存在者全体の連関のなかで、はじめてペンというひとつの存在者は存在しうる。使用という振るまいに、この理解がそなわっている。地平とは個々の存在者に先だつ、この存在者の全体である。

ところで活動力はアーレントにとって、つねに条件 (Bedingung) と相関的なものであった。じつさい「基礎的条件と基礎的活動力は相互に切りはなし得」ず (21)、条件のほうが先行するものであるとも言えない。両者はひとつなのである (A.-III.)。

たとえば労働なら、人間の生命がその条件であるが、同時に「生命がなにであるかは、労働からはじめて理解される」(21)。労働こそ、それがもたらす労苦や幸福において、生命の円環運動にひとを投げこむからだ。したがって、「労働において、私たちはじぶんたちが生命<sup>レブン</sup>である<sup>レバ</sup>ことを現実化する」(21)。条件によって活動力は可能となり、活動力によって条件は実現される。この総体性を、著者は「生起 (Geschehen)」と呼びあらわす。労働と生命とは、「生命の生起」の両側面である。生起において活動力と条件はひとつに統一されてい

<sup>12</sup> Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, A 11-2. 原佑訳『純粋理性批判』上巻、平凡社ライブラリー、2005 年、132 頁。本書 S. 17 に引用。ただし著者の解釈はハイデガーの読解に強く影響されている。カントじしんにとって超越論的哲学は、対象や存在者そのものの可能性ではなく、あくまで対象の認識の可能性を問うものだったことに注意。

るのだ。制作や活動も同様である。活動力は「主体的な契機」と「対象的な契機」(25)をとめない、主体と対象の分裂 (Subjekt-Objekt-Spaltung) として経験される。つまり活動力が主体と対象という物に物象化されるのであるが、それを生起として包括的に問うところに、著者は「包括者の諸様式」(25)を問うたヤスパースへの接近を見出す (A.-IV.)。アーレントはひとつの活動力の経験を絶対化することなく、それぞれを相対化し等分に問うが、三つの活動力の統一性をも、それらの関係を問うというしかたで問っている。彼女にとって、「具体的な人間の実存においては、これら三つの生起の様式はつねに同時に現前している」(29)ので、生起 (活動力) の様式は「相互貫入している (ineinander)」(31) のである<sup>13</sup>。

いったんまとめるなら、ヤスパースとハイデガーを参照することで見えてきたのは、アーレントの政治哲学が (1) 存在者に依拠する実証的学問ではなく、むしろ存在者を存在させる地平そのものにかかわること。そして (2) 活動力は存在者の存在理解をそなえ、存在者をそもそも可能にするものであること、(3) 活動力は“人間という物”にそなわる属性ではないし、その条件や対象もそれぞれ活動力と無関係に存在しているわけではなく、むしろ全体としてひとつの生起であるということ、であった。ハイデガー、ヤスパース、アーレントの三者はいずれも「主観 - 対象連関を超越論的に思考している」(35) のである (A.-V.)。ここから、生起 (活動力) の諸様式内部における分節 (A.-VI.) は、それがもつ諸契機にしたがってこのように分けられる (B., D., F.の各章は実際につぎの五節に分節される)。

- I. 活動力の基本的条件
- II. 活動力の主体
- III. 活動力そのもの
- IV. 活動力の生産物
- V. 活動力における共同相互態 (Miteinander)

<sup>13</sup> たとえば、制作は一時的であるから活動力の内部において、それをくりかえす必然性はないが、人間は同時に労働する生命であるかぎり、生の必要から制作を繰り返すのである。ここでは世界性の生起に、生命の生起が干渉しているのである。

## 2.2. 労働

まず労働の活動力が生命の生起として理解される (B.)。労働を可能にする基本的条件は生命＝自然<sup>14</sup>であるが、自然とは自然科学が対象とするそれではない (B.-I.)。そもそも自然は「根源的に、対象的なものとしておのれを示すことがない。要するに、自然的な対象というものは存在しないのである」(38)。アーレントにとって自然は「激しい変化」であり永遠の「巨大な円環運動」であった (39)。「自然のがわから開示される存在者は、同一にとどまるものとしてではなく、開花するものやしおれるものとして、あるいは欠如と満足、過剰として開示される。しかもこれらがつねに入れかわることとして、開示されるのである」(39)。ゆえに自然は、存在者がそれにもとづいて理解されるなにかである。

人間は生命とはなにかをアプリオリに理解している。人間は、おのれの生ある存在のなかでじぶんを開示してしまっており、ただこの開示態からのみ自然的なものとしての存在者が人間に出会われる。自然とは「…」超越論的な地平である。存在者はこの「自然という」地平から、望ましいもの、もしくは恐ろしいものとして与えられる。(39-40)

労働の主体は生命的なものとしての労働する動物 (B.-II.) であり、労働そのもの (B.-III.) は、生命＝自然という条件を現実化するものである。労働によって自然の円環運動に身を置くことで、私たちは自然の力を経験するからだ。「生命を経験し、遂行することが、労働することである」(43)。

したがって、アーレントの労働は生命の必要性を充足するための消費財 (B.-IV.) を生産する活動力であったが、著者にとってこの消費財は、生産物というより享受の経験そのものとして理解される。というのも労働は、自然を「非自然」に変形することなく、それを「私有化 (aneignen)」する、つまり取りこんでしまうからである<sup>15</sup>。労働する

<sup>14</sup> ブラウンは、アーレントにおいて自然と生命のあいだにほとんど区別が存在しないと考えている。

<sup>15</sup> 「生命は認識したり客体化したりはせず、出会われるものをそのつどすでにからだに取りこんでしまっている (einverleiben)」(51)。

動物は消費するが、「消費財は主体にとって、〔対 - 立するものとしての〕対 - 象 (Gegen-stand) ではない。消費財は、身体の情態 (leibliches Befinden) として起こってくる主観性に対立するもの、つまり客体ではない。そうではなくて消費財とは、それを享受すること (Genuß) であり、あるいはそれにたいする吐き気なのである」(49)。消費財という「生命に出会われる存在者」(51)は「内的で身体的な感覚 (Empfindung)」(49)なのだ。そして労働する動物が形成する共同相互態である社会ゲゼルシャフトもまた「生命そのものによって要請され、構造化されている」(51) (B.-V.)。

つまりは、「アーレントにあって、存在者が与えられるのは、根源的には手許にあるもの (Zuhandenes) としてではなく、生命がそれと混じりあうところのもの、生命のうちに入りこむもの、そうして生命を高めたり、減じさせたりするものとして、なのである」(54)。ここで労働概念がもつ、ハイデガー批判的な側面があきらかとなる (C.-I.)。なぜなら、人間に出会われる存在者をもつ第一次的な存在様式は、ハイデガーにおいては手許にあるもの、つまり道具 (Zeug) であった<sup>16</sup>からである。ハイデガーには、アーレント言うところの消費財のような存在者の分析はなく、レヴィナスが「現存在は飢えない」と批判しているとおりである<sup>17</sup>。ハイデガーの道具分析の影響はむしろ、アーレントにおける制作の概念を説明するうえで示唆的となるであろう。

### 2.3. 制作

制作の活動力は、世界性の生起として問いなお

<sup>16</sup> Martin Heidegger, *Sein und Zeit* (Tübingen: Max Niemeyer, 192006), §15 熊野純彦訳『存在と時間』第一巻、岩波文庫、2013年、第15節参照。

<sup>17</sup> ブラウンは、レヴィナスのつぎの一節を引用している (55. ただし、ブラウンはKrewaniの独訳を引いている)。「奇妙なことに、ハイデガーは享受という関係 (relation de jouissance) を考慮に入れていないのを確認しておくことができる。ハイデガーのいう現存在は、飢えというものをまったく知らない (Le Dasein chez Heidegger n'a jamais faim)」(Emmanuel Lévinas, *Totalité et Infini: Essay sur l'extériorité* [Paris: Kluwer], 142 熊野純彦訳『全体性と無限』上巻、岩波文庫、2005年、267頁)。ここに、享受 (jouissance [Genuß]) の語が見られる。ブラウンは労働が開示する地平に存在するものを、享受そのもの (享受する“対象”でさえなく) であるとしていたが、その読みはレヴィナスに由来することが見てとれる。

される (D.)。世界性 (D.-I.) が制作の条件であった。しかし世界とはなにか。世界は動物の環境ウミヴェルトでもなければ、「存在者の全体とか、超越とは区別される意味での内在とかを意味するものでもない」(62)。むしろアーレントのいう世界に「特徴的なのは、たとえば世界のなかで用いられる使用対象物」(62-3)であり、「世界にはあらゆる対象ゲーゲンシュテントリッヒカイト的なものが属している」(63)。対象的なものは、たんに使用される対象であるだけでなく、自然の生成消滅に抗して持続性を保つものである。労働は人間存在が生命の生起にとらわれているという「被投性の構造」(63)に由来していたが、同様に「現存在が世界へと適応しているならば、現存在は世界的であるという性格をすでに有していなければならない。世界的であることは〔…〕現存在の被投性の構造である」(64)。人間がすでに世界的であることが、制作の条件なのだ。

制作の主体は工作するひと (D.-II.) である。アーレントは制作を手と結びつける (「手の仕事」) が、「“手”の概念は〔…〕『あらゆる仕事道具や器具のうちもっとも根源的なもの』をしるしづける」(66)。手は身体のように自然のプロセスに巻きこまれておらず、自然をつかみ取る。そうすることで、工作するひとは目的をたて、それを実現する「支配者」となる。支配が、工作するひとの特徴となる。アーレントが制作を特徴づけた「物化」も、こうした観点から理解されるべきで、「川の流を水路として利用することのうちに、すでに物化が存している」(67)。

世界性が存在論的に制作を可能にするが、制作そのもの (D.-III.) は存在的に世界を可能にする。事実に制作、つまり世界の建設の過程にあっては、道具がつねに役割を果たす。それゆえ制作により、目的に役だつありかた (Zweckdienlichkeit)<sup>18</sup>が経験される「領野 (Feld)」が開かれる。この領野は、ハイデガーの「道具全体性」と一致する。目的に導かれる手段の総体が世界をかたちづくるのである。それゆえ、この世界を地平として出会ってくる存在者である使用対象物 (D.-IV.) は、持続性によって可能となる対象ゲーゲンシュテントリッヒカイト的なありかたにくわえ

<sup>18</sup> アーレントは英語版『人間の条件』では instrumentality (手段的なありかた、手段性) ということばをもちいている。ここでも概念の含意は同一である。

て、合目的性 (Zweckmäßigkeit) をもつのだ。もうひとつ、制作される物はかたちをそなえて現象する、したがって見られうるので、美しかったりみにくかったりしうる、という特徴をもつ。工作するひとの共同相互態である交換市場が、同時に (美醜を) 判断する者の共同体とされるのは、そのゆえである (D.-V.)。

制作とは、それが作り出す作品にその価値をもつような活動力であり、目的のために行なわれるゆえに、手段をすべて正当化するものだが、他方活動はそれじたいで価値をもち、(仮に目的が念頭に置かれていたとしても) その目的が純粋に達成されることはけっしてない。活動における人間の自発性 (Spontaneität) が、主権 (Souveränität) と区別されるゆえんである。自発性は他者の承認を必要とするのだ。この制作とのちがい (E.) を認めたとえで、他者とかかわる独自の領域として活動の領域が探査されねばならない。

## 2.4. 活動

活動 (F.) は複数性の生起として捉えかえされる。活動の分析は本書の半分以上を占めるが、本稿ではとくにブラウンによる活動概念の言語哲学的理解を大きく取りあげる。著者が言語重視の読みかたを実践するのは、レヴィナス<sup>19</sup>の思想を反映させたためだとしている (F.-I.-1.)<sup>20</sup>。著者によるとレヴィナスのいう「対面」 (Von-Angesicht-zu- Angesicht)、つまり私と他者の関係は、「傍目 seitlicher Blick」<sup>21</sup>、つまり第三者的

視点からは捉ええないような絶対的な隔たりである。複数性とは、レヴィナスにあって複数性を遂行することとして理解されている。つまり私と他者の関係を遂行することなのだ。それがことば (Sprache, language) なのである。

アーレントが活動の条件としている複数性 (F.-I.-2.) とは、等しさと差異の両方から構成される。差異とは「おのれを区別する活動性」 (94) であり、他方等しさは「たがいとともに語りあうことすべてのうちに存する相互性の契機」 (95) を意味している。したがってアーレントの複数性も、語りあい (活動) のうちで可能化するものなのだ。

このような、複数性によって可能になる「公開性 (Öffentlichkeit)」は、ハイデガーがいうような「世人」の支配ではなく、人間を「人格」として、唯一性において現象させるものである。活動の担い手としての政治的人間 (F.-II.)<sup>22</sup>のありかたは人格なのである (F.-II.-1.)。この「現象としての人格」 (102) は「他の人格と同時にのみ、存在する」 (104)。この同時性は「呼びかけ」という人格的關係として実現するのである。

明らかに、活動そのもの (F.-III.)<sup>23</sup>がことばを語ること (F.-III.-1.) にかかわりをもっており、したがって活動は「コミュニケーション活動 (kommunikatives Handeln)」 (110)<sup>24</sup>なのである。それゆえ言語の機能を分けて考えることが、活動の理解にもつながる。著者は言語学者ビューラーの道具モデルを援用しつつ、言語に (1) 喚起 (Appell)、(2) 表出 (Ausdruck)、(3) 叙述 (Darstellung)

<sup>19</sup> アーレントとほぼかわりをもたない思想家を持ち出すのは「恣意的」ではないかと自問したうえで、しかし著者は『活動的生』と『全体性と無限』の類似性—「概念のつくり (Begrifflichkeit) や、メタファーにいたるまでの」 (10) —に着目するなら、アーレントの思考を再構築するのにレヴィナスが果たす役割は大きい、と述べる。著者も指摘している (10, Anm.7) とおり、アーレントは『全体主義の起原』のなかで一回だけレヴィナスの論文を引用している (Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, 2nd ed. [Cleveland/New York: Meridian, 1958], 80, n. 62. 大久保和郎訳『全体主義の起原 1 反ユダヤ主義』みすず書房、1972年、153頁、注73、なお邦訳で「ルヴィナ」となっているのはレヴィナスの誤りである)。いっぽうレヴィナスがアーレントを読んでいたかについて詳細は不明。

<sup>20</sup> F.-I. は以下の小節に区分されている。F.-I.-1. レヴィナスにおける複数性概念へ/F.-I.-2. アーレントの複数性概念。

<sup>21</sup> ブラウンは引用箇所を明らかにしていないが、Lévinas,

*Totalité et Infini*, 322に見られる *vue latérale* という表現を訳したものらしい。ブラウンはこの言葉にアーレントが『活動的生』第六章で用いる「アルキメデスの点」との類似をみる。しかし、アルキメデスの点はむしろ主観の内部に発見されることをアーレントが強調している以上、ブラウンの解釈は疑わしいと言ふべきだろう。

<sup>22</sup> F.-II. は、以下の小節に区分される。F.-II.-1. 人格/F.-II.-2. 出生。

<sup>23</sup> F.-III. はさらに、以下の小節に区分されている。F.-III.-1. 活動と語り/F.-III.-2. 言語—公開的なものと私的なもの (I)/F.-III.-3. 真理と複数性/F.-III.-4. 自由—公開的なものと私的なもの (II)/F.-III.-5. 赦しと約束/F.-III.-6. 暴力/F.-III.-7. 権力/F.-III.-8. 権威/F.-III.-9. 支配。

<sup>24</sup> 著者は、この概念はハーバーマスのそれとはことなると強調している。後段、真理や権力の概念を問題にするさい、著者がアーレントにおける合意の重要性を否定するもの、ハーバーマスとの違いが際だつ箇所であろう。

の機能があることを確認する。

ただしここでも著者は、アーレントはたんに言語の機能をあつかうのではなく、その可能性を問う超越論的な視座に立つとして、機能の「手まえ(vor)」を問題にする。

まず喚起機能(F.-III.-2.-a.)は、ことばが向けられる相手になにかを喚起することを意味しているが、その手まえにあって言語は「語りかけ(Ansprechen)」そのものである。言語は人格としての他者に語りかけ、そこで公開的空間がはじめて存立する。いっぽう言語は語る者の内面を表出する機能(F.-III.-2.-b.)をもつが、その手まえにあって言語はそもそも「私の現存在であり、人格の現出」(116)そのものである。そこで「私」が公開的にはじめて存在しうるのだ。最後に、言語はことがらを叙述する機能(F.-III.-2.-c.)をもつわけだが、その手まえにおいて、語られる「対象は、つねにすでに言語へと引き込まれてしまっている。対象は言語に先だつしかたで私たちにたいして存在することはない。対象をその“原的状態”において把握することはかなわないのである」(118)。アーレントにとって、対象のリアリティもまた複数性に依拠しており、対象は語りにおいてはじめて存在しうるのだ。つまり言語は他者 - 自己 - 対象のいずれをも、はじめて存在せしめるものなのである。

このように活動は言語活動にほかならないので、アーレントの権力概念(F.-III.-7.)も言語と結びつけられて再解釈される。暴力と同一視されることもあったが、権力はひとを結びつけるものであり、その結びつきは語りあうことに由来する。言語はしかし、人びとを結びつけると同時に分離するものである。「権力とはいまや、人びとを分離されたものとして保ちつつ、そのなかで同時に結びつける、言語の“力”のことである」(154)。権力による結びつきをたんなる集合から区別するのは、この、結びつけつつ関係させる〈あいだ〉<sup>25</sup>なのである<sup>26</sup>。

<sup>25</sup> アーレントにおける〈あいだ〉の意味に注目した論考として、矢野久美子『ハンナ・アーレント、あるいは政治的思考の場所』(みすず書房、2002年)がある。とくに第2章第2節を参照。

<sup>26</sup> 活動概念によって、以下の伝統的な諸概念も必然的に変更が加えられる。真理(F.-III.-3.)、自由(F.-III.-4.)と

活動は言語にもとづく関係であるから、その「生産物」は物語＝歴史(F.-IV.)である。相互に活動し語りあうことはつねに新奇な出来事(Ereignis)を生じさせ、物語を生む。「本質からして新しい出来事を把握するのは、(こちらも)あたらしい理解の尺度やカテゴリーなのである」(178)。したがって物語＝歴史は、既存の理論や歴史哲学に当てはめることによって理解されるべきものではないとされる。

さらに活動の共同相互態として国家形態(F.-V.)<sup>27</sup>の問題があつかわれ、さいごに活動と思考の関係(G.)の問題が取りあげられて本書は締めくくられる。

### 3. 本書の評価

くりかえしになるが、本書のいちばん興味ぶかいところみは、アーレントの活動力を超越論的な概念として読むことにある。著者が「超越論的」と名指すのは、対象や存在者がそれによつてはじめて可能となるようなレベルである。著者はそれを活動力そのものにもとめる。活動力によって、存在者が可能になるというのだ。

労働は、「自然」という地平を開示し、そのなかに消費財を存在者として出現させる。使用対象物のような対象的性格をもたない消費財は、主体に

---

いった哲学的概念、ふつう宗教的・道徳的に理解される赦しや約束の概念(F.-III.-5.)、そして暴力(F.-III.-6.)や、権威(F.-III.-8.)、支配(F.-III.-9.)といった政治的諸概念が脱構築される。このうち真理は、伝統的な「主観と対象(知性と物)の一致」でも、「合意」でもないとされる。「対話がそれについてなされるところのものは、同一物であるけれども、諸人格が根本的な差異において現出することを可能にする」(127)。つまり際だつのは合意よりも差異である。アーレントにとっての真理は絶対的ではなく、「もろもろの主観が対象について一致をみないことにたいして、相互に反駁するプロセスのうちに存する」(128)と著者はいう。他方自由は、人格が現象することにかかわらせて論じられ、人格が人格間の交渉にあって開示されることが、内的自由と区別される政治的な自由とされる。アーレントの真理観については、Andrew Brennan/ Jeff Malpas, “The Space of Appearance and the Space of Truth,” in: Anna Yeatman et al. (eds.), *Action and Appearance: Ethics and the Politics of Writing in Hannah Arendt* (New York: Continuum, 2011), 39-52.

<sup>27</sup> 同節では、F.-V.-1. アーレントのモンテスキューにたいする関係／F.-V.-2. 全体的支配の本質と原理／F.-V.-3. 政党民主主義と評議会民主主義／F.-V.-4. 国家の諸形態の基本的経験／F.-V.-5. まとめ、といった諸問題が扱われている。



対立する対象と言うよりも主観性の変容である。消費財は生命の生起という事象の契機であり、生命に取りこまれるものとして存在する。

制作は、人間が存在論的に世界をもちうる存在者であることにともづいて、可能になっている。制作が開示する地平に現われる存在者は、世界性の生起という事象の契機としてみれば、つねにすでに有用性と持続性をもつものとして発見されている。

ここにはいわば「転回」がある。「消費財が生命を養うのは、その物にそういう属性が備わっているから」、「制作された物が有用なのは、その物が有用な属性をもつから」—こうした考えかたはいずれもあべこべということになる。すなわち私たちの活動力にそなわる存在理解によって、あるいは生を養う消費財が、あるいは有用で持続的な物が「発見」されるのである。もっといえば、活動力によってはじめて存在するようになるのだ。ここで活動力は、たんに対象に働きかける存在的な能力から、存在者を開示する存在論的な出来事に移行したわけだ（著者が活動力を生起と呼ぶのは、主体と対象を事物的に分節化せず、出来事という全体性のもとでそれを理解するためだ）。

たとえば労働が開く地平のうちに見出されるならば、影は「光や熱のあたらない場」としてではなく、暑さやまぶしさを感じないこととして与えられる<sup>28</sup>。あるいは「川の流れを水路として利用することのうちに、すでに物化が存する」。つまり流れはすでに自然ではなく、制作の地平において有用性をもつ使用対象物として発見されている。問題は影や流れという「物」に客体的にそなわる属性ではないのだ。

他方活動の言語哲学的解釈にも、超越論的な見かたは行きわたっている。著者は複数性と活動を語りの遂行として理解しなおし、そこに主体 - 対象 - 他者の開示態が存することを見出した。語りは既存の存在者について語るのではなく、存在者をはじめて存在させる超越論的活動力として理解されている。

超越論的な視点の導入は、各活動力にあらたな

光を照明し、たしかにアーレントの哲学的思考を細部で発見しているように見える。

とはいえ批判されるべき点が多い。大きくは三点に分かれる。

### 3.1. 目次構成にかんする問題点

ここで構成の問題はたんに分かりやすさや審美上の問題ではなく、アーレント理解そのものにかかわっている。

まず、著者がなぜ B. 労働→D. 制作→F. 活動の順番で分析を進めたのか、その点が明らかにされていない。たしかにアーレントの『活動的生』じたいが、労働→制作→活動の順に活動力を分析しているが、ほんらいは彼女がなぜこの順番で分析したかも、説明されるべきことがらにぞくするというべきだろう。

たしかに著者は、活動力が労働→制作→活動の順に「一種の階層秩序」(33)をなし、先のものが後のものを可能にすると述べている。また労働に出会われる存在者のほうが、制作に出会われるそれよりも第一次的であるとも述べていた(C.-1.)。しかし、この階層秩序において、先のものがどのように後のものを可能にするか、などは論じられていないのだ。ここでくわしく展開することはできないが、動物的な次元で展開する労働にたいし、制作によって自然に対立する対象性の次元が可能となり、この次元すなわち世界によって、生と死のあいだを生きる存在者としての人間にとって活動が可能になる—このような概念の歴史的・弁証法的な展開を『活動的生』に読みとり、論理化することも可能であるように思われる。たしかに『活動的生』は、そこに事実的な歴史記述が挿しはさまり、論理の展開が錯綜しているのだが。いずれにせよ著者の意図が哲学的体系の再構築にあるとすれば、概念そのものに内在する論理にしたがって体系を展開させる途を採るべきである。けっきょく著者はアーレントじしんの『活動的生』の目次に疑いを容れず、また目次を様式的に整えることに配慮しすぎて、概念そのものの体系的展開の可能性を見損なったのではないだろうか。

同様の指摘は「I. 条件→II. 主体→III. 活動力そのもの→IV. 生産物→V. 共同相互態」という章内の分節についても可能だ。著者は、活動力を生起

<sup>28</sup> 「影がつねにすでに“理解”されるのは身体の変化としてであり、光の強さや熱放射が減少する場所としてではない」(51)。

として捉え、可能性の条件から主体、対象までをふくんだ全体として把握しなおそうと努めている。ところが実際の記述を見ていると、条件の節で生産物を先取りしていたり（たとえば労働の条件である自然をあつかうとき、すでに自然に見出される存在者の特徴に触れている）、主体の節で活動力そのものを先取りしたり（たとえば制作するひと[D-II.]は、制作される対象の対象性によって支配的性格を帯びる）と、構成に破綻が見られる。形式的に言っても、主体を活動力そのものよりもまえに記述してしまえば、活動力は主体がもつ能力のように見えてしまうのは避けがたいように思われるが、このことは著者の方針に反するだろう。また、活動はそれじたいが関係を構成する活動力であることに鑑みるなら、その共同相互態をあらためて国家形態論として読むのは、アーレントの理論に忠実といえるのか疑問である<sup>29</sup>。著者が活動力を生起としてとらえ直したその戦略は、この出来すぎた節構成のせいで自滅させられたように見える。むしろ生起という動態的なことがらならば、その切断よりも連続が問題であろう。労働や制作は、生産する活動力であるかぎりその生産物と不可分であるし、労働する主体はその生産物を身体に吸収することによって、制作する主体は生産物に対立することによって、その主体性をかたちづくるという側面がある。主体はまさに活動力の主体として、活動力によって成立するという動態をとらえなくてはなるまい。

構成は、形式的な美点を取るより、そのつど問題となっていることがらにあわせてかたちづくられるべきであると思われる。本書は後半になると

ダイナミズムを失い、アーレントのたんによく整理された要約の体をなすようになるが、その一因は形式的な構成にあったと思われる。

### 3.2. 思想史的な理解の問題点

ヤスパースとハイデガーの影響を思想史的に理解することは、タイトルにあったとおり本書が自覚的に担った課題であろうと思われる。しかし、著者は両者の思考の図式を大枠として採用し、当てはめているにすぎないという印象がぬぐえない。著者が検討したヤスパースの概念は「理性」や「包括者」であり、ハイデガーのそれは「超越論的」という概念であった。全体的にも「存在者」「存在理解」「地平」「開示」といったハイデガー存在論の術語を多用している。しかしそれらはアーレント自身がかならずしも術語的に使用したものではない。

たしかにアーレントは両者の哲学に馴染んでおり、みずからの思考を自然とその枠ぐみにあわせてかたちづくっていることは事実である。しかし外部の図式をあてはめることを無際限におこなうなら、結局アーレントを読むのにどんな恣意的な枠ぐみを使ってもよいことになる（じっさい、著者は直截関係ないレヴィナスを頻繁に引用する）。むしろ、アーレント自身この両者からきちんとした引用を行っていないという難しさはあるが、それだけになおさら幽かな痕跡をも見落とさず、典拠との対応を取る作業が、体系的再構築にも欠かせないはずである。じじつヤスパースやハイデガーを意識した表現は、アーレントの著作の随所にちりばめられている。このように典拠を確定する「文献学」的な作業を、著者がじゅうぶんに果たしたとはいいがたい。しかし再構築が恣意的なものに終わらないようにするためには、そうした作業は欠かせないといえるだろう。

### 3.3. 超越論的な読解の問題点

さいごに、著者による活動力の超越論的理解そのものがもつ問題点について考えておきたい。著者は活動力をそれぞれ生起と理解し、それぞれに独自の存在理解を認めた。しかし存在者が、けっきょくその存在が理解されているところのものにほかならないとすれば、労働が理解する存在者は、

<sup>29</sup> むしろアーレントは、労働や制作の共同性が、活動に由来するという説明をしている箇所もある。「仕事の専門化と労働における分業が共有しているものは、組織化(organization)という一般原理にすぎない。この組織化という原理はそれじたい、労働にも仕事にもかかわりのないもので、生命の厳密に政治的な領域におのれの起源を負っている。すなわち活動するための、共に協調して活動するための能力をひとがもつ、という事実を負っているのである。政治的組織において、ひとびとはただ共に生きているだけではなく、共に活動しているのであるが、この政治的組織という枠ぐみの内部でのみ、仕事の専門化や労働の分業も起こるのである」(Hannah Arendt, *The Human Condition*, 2nd ed. [Univ. of Chicago Press, 1998], 123 志水速雄訳『人間の条件』[ちくま学芸文庫、1995年] 183頁)。

制作する人間にとってはけっして開示されえないものになるはずである。ところが、アーレントにあっておのおのの活動力は相互に無連絡なわけではなく、相互貫入している。ここで、自然を労働の開示する「超越論的地平」と見なす解釈は、或るていど破綻している。たとえば労働する動物が道具を利用する場面や、制作するひとが生命を配慮する場面が、『活動的生』にはたしかに存在する。こういった局面において、労働と制作それぞれに地平を認めるとすれば、存在者全体が出現する地平が複数化してしまう。だがそれは地平という概念そのものと内的に矛盾するだろう<sup>30</sup>。

まずアーレントにとって自然と世界が、どちらも地平という資格で語られるというのは正しいだろうか。『活動的生』（『人間の条件』）において、人間は自然に抗するものとして世界を建設するとされる。自然とは彼女にとって永遠の回転運動であるが、持続性をもつ物がそのただなかに置かれることによって、はじめて人間は対象性の次元を獲得するはずである。他方自然は、世界に對抗するものという資格においてこのときはじめて発見される。人間が対象としてあつかえるのは、人為化された自然だけである。世界が地平であるといえるかは留保するが、いずれにせよ自然と世界は相互に换位可能な対等なものではない。

また、地平とは存在者をそのうちに存在させる全体であるが、ブラウンにおいては「存在者」の解釈も揺らいでいる。アーレントにおいては、人間、生命（生物）、物といった存在者が考察の中心となることが多いが、これらの存在者はさしあたり現象し、持続的に同一性をたもつ個体として考えられている。それゆえ、ブラウンは消費財を一方では存在者と見なしながら、他方ではそう見な

していないということになる。

なぜか。アーレントにとって、制作された物は一個の独立した存在者である<sup>31</sup>。それにたいして労働する動物が消費する消費財は、かりに一時的に独立した存在者（たとえばパン）になるにしても<sup>32</sup>、すぐさま取りこまれ独立を失う。その点で、アーレントは消費財がもっとも世界性がなく、自然的だと述べていた<sup>33</sup>。ブラウンはこの点をとらえ、消費財を主観性の情態にまで還元する。しかしそうなれば、消費財とは主体から独立した物ではなくなるのだから、（少なくともアーレント的な意味では）もはや存在者とは言えないものであるはずだ。同時に、ブラウンが自然という“地平”の内部に出現すると言うものが存在者でなくなる以上、自然も地平の機能を果たすことができなくなり、この場合も自然は地平ではないことになる。

さらに、「地平」の概念を仮にアーレントのうちに認めるとしても、ブラウンの解釈には未解決の問題が残ることになる。つまり、存在者が存在することを可能にする地平の開示それ自体を可能にするものが、ブラウンの理解のなかでは不明瞭なのである。ハイデガーは、現存在にとって存在者の全体ともいえる世界が開示されるのは、究極的には先駆的な覚悟性によるとしていた。それはつまり、地平の開示を現存在の自由に基づけたことを意味する。ひるがえって、ブラウンの議論のなかで地平の開示（活動力の生起）はなにに基づいているのか。それは人間の意志や決断なのか、あるいは条件によって必然的に強いられるのか、この点について答えていないのである。その結果、「人間が世界を制作しうるのは、人間が世界的に存在しているから」といった、ほとんど同語反復的な説明に終始する場面が出てくることになる。ここでブラウンは世界を制作することがなんである

<sup>30</sup> フッサールはたとえばこう述べている。「世界は、一個の存在者、一個の対象のように存在するのではなく、唯一性において、すなわちそれに対しては複数が無意味であるような唯一性において、存在する。あらゆる複数とそこからとり出される単数とは、世界地平を前提にしているのだ」（エドムント・フッサール、細谷恒夫／木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』〔中央公論社、1974年〕、200頁）。地平がふたつあるというのは、おおまかな比喻でいえば、視界がふたつ存在すると言っているのに等しい。視界のなかに物がふたつあることは考えることが出来ても、視界そのものがふたつ存在することは想像しがたいはずである。

<sup>31</sup> 「世界のなかに独立した存在者として留まるのにじゅうぶんな持続性をもった、まったく新しい物が人間の工作物につけ加わったとき、〔制作過程は〕終わりにいたる」（Arendt, *The Human Condition*, 143 『人間の条件』232頁）。

<sup>32</sup> 「それら〔生命の必要物〕は人間が作りあげたかたちによって、じぶんのいつときを人造物の世界のうちに獲得するのだが、それらはかたちをもちながら、世界のほかのどの部分にくらべてもより急速に消えてゆく」（*Ibid.*, 96 前掲訳書、151頁）。

<sup>33</sup> *Ibid.* 同上。

かも、人間が世界的に存在することがなんであるかも、まったく説明していない。

地平の開閉にかかわることについて少しでも説明に近いものがあつたとすれば、ブラウンが言語に認めた超越論的なはたらきが、それであろう。言語において、主体 - 対象 - 他者が出現する。この部分は注目にあたいする。とはいえブラウンは、言語において主体や他者が出現してくる機序を明らかにしておらず、かつ活動力ごとの地平という考えかたから出発してしまったために、ここでも地平の開示の問題に踏み込めていない。

さいごに、アーレントを全面的に超越論的に解釈することで、ブラウンはアーレントのある重要な一面を取り逃していると言えるだろう。つまり、アーレントが極端な主観化を恐れ、それを「世界からの逃亡」と規定していた事実である。「使用される物からなる客観的世界に背を向け、使用すること自体という主観的なありかた (subjectivity) に退く」<sup>34</sup>ことの帰結は、つぎのようなものである。

ホモ・ファールベルは、あたかもあらゆる物がクレーマタ、つまり使用対象物の分類に属するかのように、判断するだろう。したがって、プラトンじしんが出す例にしたがうなら、風がみずからの権利において自然力として理解されることは、もはやなくなるだろう。暖かさや爽快さにたいする人間の要求との一致においてのみ、風は考慮されることになるのである—このことが意味するのは、もちろん、客観的に与えられるものとしての風は、人間の経験から消し去られるということである。<sup>35</sup>

この一文をブラウンの解釈図式の内部に位置づけるのがむづかしいことは、明白である。アーレントにおいて客観性という概念がもつ独特の意味合いを検討する必要があるが、それは単純な（単独の主観性に立脚した）現象学的図式の導入では困難である。アーレントのいう客観性や現実性の概念は、複数性、つまり主体が複数であることその

ものから導きだされているからだ。そのためには、複数性を基本概念とする体系の再構築が期されているのである。そうでなくては、また他者の問題が、主観から他者への超越の問題として回帰してくることもなる<sup>36</sup>。アーレントは人間存在をはじめから他者との関係において考察しており、それが彼女の独自の哲学であつたはずである。

## おわりに

ブラウンの研究は、アーレントの哲学性を正しく評価するという課題にたいして、あまりポジティブな成果を与えてはくれなかったというのが私たちの最終的な評価である。ブラウンのころみは結局、さまざま哲学者の思想を外挿しておおざっぱな枠組みをつくり、アーレントの思想をその枠にむりやり収めようとしたものだったと言えよう。そうはいってもブラウンの研究は、細部において輝きを放っている箇所もある。超越論的に理解しようとするなかで、アーレントのいう物や生命が、主観性や目的連関との関係において存立していることが見えてきたからである。物や生命はたんに人間がもつ対象であるのではなく、その対象性さえも、関係的に成立し、構造化されていることがあらわになったのである。とはいえ、(超越論的な) 活動力を起点に問いを進めた結果、アーレントを「主観性の哲学」に還元してしまうことにもなったように思われる。ここでは問題提起のみにとどまるが、評者の見立てでは、彼女にとって（単独主体の）活動力よりも根源的な概念は、〈あいだ〉であるように見える。つまり複数の主体を分離しつつ関係づける根源的な〈あいだ〉を出発点とした、複数性の哲学をこそ、再構成しなくてはならないと私たちは考える。このアイデアの具体化には、別稿を期したい。

いずれにせよ、ブラウンはアーレントの「断定」的な言明をそのまま受け取っている箇所が多い。たとえば複数性や世界性はたんなる所与の概念、証明済みのことがらとしてあつかわれるべきでな

<sup>34</sup> *Ibid.*, 155. 前掲訳書、247 頁。

<sup>35</sup> *Ibid.*, 158. 前掲訳書、252-3 頁。

<sup>36</sup> 著者が依拠したレヴィナス『全体性と無限』は、自存的な〈同〉という主体が成立するのを俟って、おなじく自存的な〈他〉と出会うとしているが、アーレントはむしろ他者との関係から主体を構想するのであり、ここでもレヴィナスの図式的当てはめがミスリーディングになっている。

く、それらこそ「それがなんであるか」と問われなくてはならない。アーレントはいささか断片的であるにせよ、じつはそれを遂行しているのである。それをしっかりと読みとる読解がまず求められる。現象学的であれば哲学的なのではなく、この問うことそのものの遂行が哲学であるはずである。私たちに必要なのは、彼女とともにそれを再度遂行することであるが、この課題はいまだ手がけられていないように思われる。

(はしづめ・たいき 東京大学大学院修士課程)